

徳島県上勝町から学ぶ中山間地域の活性化

——葉っぱビジネスとゼロ・ウェイストの取り組み——

青木 龍平、加地 七菜子、古梅 創己、下原 雄祐、
武田 愛里、尖 捺嬉、牧井 楓、安中 悠

はじめに

私たち国際学部グローバルスタディーズ学科齋藤ゼミではSDGsに代表される持続可能な社会の実現に向けた取り組みや、地域社会のあり方について学んでいる。地域に即してさらに具体的に考えるにあたり、私たちは2023年8月28日から29日で徳島県勝浦郡上勝町に学生8人、教授1人の計9人で訪問した。上勝町が日本で初めてゼロ・ウェイスト宣言をしたのが2003年で、今年ちょうどそれから20年となる。同地の活動から世界的な課題であるゴミ問題の解決に向けた手がかりを探ることを目的とした。

上勝町は徳島県東部に位置し、面積が109.68平方キロメートル、人口約1500人の四国で一番少ない町だ。最盛期は約6000人が住んでいたが、時代とともに減少し、現在では東京の渋谷スクランブル交差点を一回で渡る人数とほぼ同程度になってしまった。それだけでなく、高齢化が進み、人口の半分以上が65才以上の高齢者である。また、この地域の88.3%が森林で、昔は林業が主な産業だったが、林業に代わり40年ほど前から「葉っぱビジネス」が町を代表する生業となっている。人口などの点では日本に数多くある中山間地域の中の一つであるが、他方日本の一般的な町のゴミのリサイクル率の平均が20%程なのに対し、上勝町のリサイクル率は80%を超えている点は大きな特徴である。

1. 上勝町のこれまでの取り組み

上勝町では、行政が主導するのではなく、町民主体による自治が長年行われてきた。その代表的な取り組みの1つとして1993年から始まった1question運動会、略してIQ運動会がある。集落ごとに住民

が問題を取り上げて、問題の解決策を考え、資料を作成し、行政に示す。その提案を受けて役場が資金を出すとともに、住民もボランティア活動を通じてその問題を解決するのである。かつてはこの方式は有効であったが、近年は少子高齢化が進み、ここ数年はこのやり方では無理が生じている。そのため、課題解決にあたっては、現在町内に10社ほどある事業所のトップと町内の役場職員で話し合い、解決方法を探っているという。

これ以外にも、住民自治を表す取り組みとして2003年から行われている有償ボランティア輸送事業がある。過疎化により、上勝町にはタクシー会社はなくなってしまったが、移動手段としてタクシーを必要とする住民がいるため、町にボランティア登録をしている人が自家用車を活用し、そのサービスを必要としている登録者向けに交通の便を提供している。

2. 葉っぱビジネス

葉っぱビジネスとは、住民が所有する山において、自身で料亭や飲食店に使用される「つまもの」という「葉っぱ」を収穫し、流通させることによって成立する上勝町特有のビジネスとなっている。

この事業が生まれた背景としては、1980年ごろまでの上勝町における主要産業であった林業やみかん農業が、それぞれ木材の海外依存と、大寒波の影響により打撃を受けたことに起因する。そして当時の農協職員であった横石氏が、代替の事業を模索する際に思いついたビジネスが、「いもどり」となった。

今では有名な葉っぱビジネスであるが、最初は地域の人々にも受け入れられなかった。横石氏が「山にいくらでもある葉っぱを売る」と考えたことは、

あまりにも「あたりまえ」だった。しかしながら、発想を転換し、地元にあるものをもうまく活用するということが、画期的なアイデアを生み出す一つの方法なのだろう。

「つまもの」の収穫は、重いものを持つことができない高齢者や女性にとっては体力的負荷の少ないビジネスである。さらに、株式会社いどりがマーケティングを担当し、農協が流通を担うなど、各関係者の連携によりこの事業が確立されている。また、事業に参加する住民もタブレット機器などを積極的に活用しているほか、売り上げランキングが公表されることから互いの競争意識が刺激され、さらなる利益を生み出すインセンティブとなっており、うまく事業がまわっているということがわかった。なにより、この事業を担う高齢者の方々の非常に生き生きとした表情から、葉っぱビジネスがこの環境に合っているビジネスであることが見てとれた。

3. ゼロ・ウェイストへの取り組み

上勝町が注目を集めるもう一つの理由は、ゴミをなくすことを目指す「ゼロ・ウェイスト」への取り組みである。

上勝町において、ゴミの処理方法は時代と共に変化してきた。1900年代末まで、野焼きが一般的な方法であり、その後、町に二台の焼却炉が導入された。しかし、2000年に入りダイオキシンへの規制は強化され町の焼却炉が使用不可能となり、他地域への委託をせざるをえない状況に直面した。委託によりゴミ処理にかかる費用は大きくなった。このような懸念から生み出された新たな計画が「ゼロ・ウェイスト」への取り組みである。上勝町議会で可決後わずか3ヶ月という短い期間で、ゼロ・ウェイスト体制が2003年から始まった。

この体制では、通常見られるゴミ収集車は上勝町では運行されていない。生ゴミは、各家庭で各自が所有する畑内でコンポストあるいは、電動生ゴミ処理機によって処理されている。



図1 電動生ゴミ処理機

町民は家庭で出る生ゴミ以外のゴミを洗浄し乾燥させ、「ゼロ・ウェイストセンター（旧ゴミステーション）」に持ち込む。平日は7時30分から14時、土日は7時30分から15時30分まで営業しており、町民各自が都合のいい時間に訪れ自ら分別を行う。また、自らゴミの運搬ができない人々のために、2ヶ月に一度運搬支援が行われている。

現在は、ごみを45分別し、資源として再び利用されるもの、ゴミとして処理されるものと細かく分けられている。ゼロ・ウェイストセンターでは、ゴミの処理にかかる費用、あるいは買い取り価格、どこでリサイクルされ、何の資源として再利用されるのかが明示されている。町民が一目でゴミがどのように処理あるいは変化するのか理解できる。



図2 ゴミ分別

また、このゴミ・ステーション内には「くるくるショップ」と言われるリユースを促す場所が設置されている。ここでは、まだ使用できるが不要となった衣類や雑貨などが持ち込まれ並べられている。持ち込めるのは町民限定で、持ち込み不可能と記載されているもの以外はショップ内に並べられる。また、町外の者が持ち帰ることもできる。持ち込まれた物、そして持ち帰られるものすべて計量されるため年間どのくらいのものが入リユースされたか管理できる。

このような取り組みの結果、現在上勝町の1日1人当たりのゴミはおおよそ460gと全国平均の約半分の量まで抑えられている。



図3 くるくるショップ

2020年4月に旧ゴミステーションをリニューアルしたゼロ・ウェイストセンター内には、ゴミの収集場所に加え、宿泊施設も建設された。ゼロ・ウェイストアクションホテル“HOTEL WHY”では宿泊を通し、ゼロ・ウェイストが体験できる場所となっている。



図4 HOTEL WHY

このように上勝町では、町民一人一人の努力もあり高いリサイクル率を達成している。このような取り組みが評価され、総務省の2021年度「ふるさとづくり大賞」では、上勝町は最優秀賞である内閣総理大臣賞を受賞した。こうした取り組みが注目され国内外からの視察者が上勝町を訪れている。今後は、「未来のこどもたちの暮らす環境を自分の事として考え、行動できる人づくり」を2030年までの重点目標に掲げ、持続可能な社会へとより前進させることを目指している。

4. 木質バイオマス事業

上勝町では以前まで林業が盛んであったが、林業の衰退により現在は森林の荒廃が危惧されている。なんとか木材を利用できないものかと考えて、上勝町では木質バイオマスエネルギーに取り組んできた。バイオマスを実際に使うのであれば、それまで重油を多く使う所に導入するのが循環型経済への転換には効果的であろうということで2004年度から2年の間に、環境省の「環境と経済の好循環のまちモデル事業」を受けて、「月ヶ谷温泉」に木質チップボイラーとチップを製造するための粉砕機、ダンプロックを導入した。



図5 月ヶ谷温泉

木質チップボイラーを購入しようとした際、国内の機械を探したが、なかなか見つからず、オーストラリアから基本的に全自動で動くボイラー装置を輸入した。この機械は約1億3000万円かかるために国

の助成金を使った。杉の間伐材をチップにして使用しており、チップは1日に1t炊き、1kgが20円のため、現在の重油価格が100円と考えると、チップボイラーの方が燃費が良いことが分かる。また、針葉樹や杉の木の皮など硬い木材を燃やした方が熱効率が良い。導入当初は、木質チップは上勝町が地元の「株式会社モクサン」が手配し、チップも地産地消であった²。諸般の事情から現在では上勝町内での調達は無理となったが、それでも建築材なども譲り受け、県内からの調達は基本としている。

燃やした後の灰は農家さんに無料で持ち帰ってもらい、畑などで活用してもらう。灰のアルカリ性は畑にも良いと言う。これもまた重要な循環である。このように、木質バイオエネルギーの利用により、二酸化炭素の排出を抑え、環境と経済の好循環を生み出すことを目指している。



図6 木質チップボイラー



図7 粉碎機

5. 地域おこし協力隊

中山間地域には地域おこし協力隊が活動している場合が多い。今回私たちは地域おこし協力隊の梅西正人氏から移住のきっかけや協力隊の活動内容を伺った。

元々介護職に就いていた梅西氏は高齢者が施設内でも何らかの役割を果たし、充実した生活を送ることができないか模索していた。そこで偶然株式会社いろどりの記事を目にし、高齢化に伴う様々な問題を福祉と連携して解決するいろどりの取り組みを実際に見たいという思いから株式会社パンゲアが主催する起業塾への参加を決めた。起業塾の参加から1年後、実際にここで働き始めることとなった。それ以降感じたのは、いきいきと生活している高齢者が多いことであった。上勝町の特産品の1つであるお茶の木は標高の高い山の斜面に沿って立ち並んでおり、茶摘みは炎天下に全て手作業で行われる。このような体力作業が必要だからこそ高齢者になっても足腰が強い人が多く、町民の中には90歳を過ぎても農機具を使いこなす人がいるようだ。また、いろいろビジネスのように高齢者がやりがいを感じながら働く環境が整えられていることも元気でいきいきと働く高齢者の創出に繋がっている。

このように上勝町では高齢者ひとりひとりが社会活動に参加できるような環境が整っており、それが町の活性化にも繋がっているのだと学ぶことができた。

結論

私たちは、上勝町の様々な取り組みを見学し、学びを深めることができた。上勝町では、いろどり事業を中心に高齢の方々が活躍しており、またゼロエミッションの実現に向け、町民が主体となって取り組んでいた。そしてこれらを可能にしていた要因の1つとして、小規模なコミュニティがあげられるであろう。町の全人口が1500人程度であり、住民同士の結びつきが強いことが特徴である。そのため、「ゼロエミッションに取り組む町」というアイデンティティが形成され、メディアを通じて社会から注目されることにより、町民の活動に対するモチベーションが向上されていった。

一方で上勝町が抱える問題も学んだ。上勝町の住民同士の結びつきの強さは、良くも悪くも噂がすぐに広がってしまうという側面も抱えている。他地域の人々が移住するにあたって敷居が高くなってしまいう要因ともなっているようだ。

また現在高齢者を中心に活気付いているいろどり事業においても、後継者不足が非常に深刻な問題となっている。事業は血縁関係にある人々が引き継ぐことが一般的であったが、業務内容に関心が低くなりがちなことや町を出ることを希望する若者が多い事が、後継者が不足する背景にあるとされている。

このように上勝町はゼロエミッション宣言で注目されている一方、様々な問題にも直面している。他の地域は、上勝町の取り組みと特色、また現在抱えている問題点を理解した上で、上勝町の現状から持

続可能な社会の実現に向けたヒントを得ることができるとは思っていないかと思った。

謝辞

今回の訪問にあたっては、関係者の方々の多大なご協力を頂きました。ここに感謝申し上げます。

注

- 1 株式会社いろどり、事業紹介
<https://irodori.co.jp/about/> 参照。
- 2 株式会社もくさん
<https://mokusan.co.jp/> エネルギー/ 参照。

参考文献

(株)バンゲアによる訪問時配付資料
総務省 上勝町

https://www.soumu.go.jp/main_content/000063256.pdf